

左衛門封印す。男女子供七人・母共不殘一族、右三人之縁者へ指預に相成り、從弟以上不殘遠慮。内藏允屋敷其の日翌日切に取毀ち、明屋敷と相成り、諸道具之内御紋付有之分は不殘被取上由と。又寛延元年四月十八日大槻内藏允五ヶ山之内に禁錮を拵へ、此の日成瀬居宅に横目村田吉左衛門罷越し申渡し、途中御徒横目等指副ひ、五ヶ山に指遣す。然る處同年秋頃食を持ち來る百姓之内に方便を以て、金澤に遠慮致し有之大槻長左衛門・園田兵太夫方に預り罷在る母等へ文通す。其の取次は小松屋佐七と云ふ者也。返書之頃金銀たばこきせる・硯などの類、百姓取次ぎ獄中へ入る。其の金子を以て百姓を偽り與之、小刀を求め、寛延元年九月十二日、小刀にて獄中に自害す。依之兄大槻長左衛門禁錮、母並に園田兵太夫母共禁牢、兵太夫並に大槻長太夫は人持寺西市正・篠嶋織部へ被預、其の外一類縁者共嚴敷遠慮被命とあり。

○松原町

此の町名は、尾山八町の一町にて、佐久間盛政尾山在城の頃建てたる町名也といひ傳へたり。加府事蹟實錄に云ふ。

昔金澤城地に本源寺ありし頃は、今の御門前町不開門の前通をば松原町と稱す。其の頃は此の邊町端にて穢多など居住し、松原なりしゆゑに町名とす。不開門の本名を松原口門と呼べるも此の故なりといへり。金澤深秘錄には、松原町は昔町端にて、穢多の居住所なりしを、枯木橋へ追ひ出し、其の跡へ御門前町を追ひ出すといへり。但し深秘錄の説は請けがたし。按ずるに、此の地は寛永廿年に東照宮を建立ありて、松原町を殘らず門前地と定めらる。依つて俗に御門前町と呼びけるにより、松原町の古名は絶えたる如く成りたるを、明治廢藩置縣の後、戸籍編成に付き町名取調の際、御門前町の名を廢し、松原町の古名に復したり。

○松原町奇事古傳話

松梅語園に云ふ。利常卿の時藩士板坂平内怪異の者に逢ひ、野々村勘左衛門牛鬼に逢ひたるよし、世子少將公へ申し上げざるを、藤田平兵衛即ち承り居たり。板坂平内が居屋敷は松原町邊不開門の際なりしが、前廉より下人共色々の者に逢ひたるよし沙汰しけるに、或夜下女露地へ出で、韭を取りに參りければ、何やら上より覆ひけるに付き逃

げ込みたり。其の由平内承り出でけるに、又覆ひけるゆゑ抜打に切り拂へば、行衛もなく失せたりけり。其の後或夜容ありて、平内も座敷へ出で居けるが、露地なる雪隠へ參りけるに、外より戸を押したり。押返しけるに又押しけるゆゑ、無理に押し明け出でければ、大きな黒坊主組付きたり。組合ひける内脇刺を抜き突きければ、其の儘逃げ行きけり。平内茫然としてありけるに、客を初家來共、久敷雪隠より歸らず心元なしと來り見れば、右の次第を申聞け、手などもかきさかれたり。さて彼の血を慕ひ見けるに、惣構堀の端まで有りて、夫れよりさきは見えず。堀を飛び越え逃げ行きたる体なり。彼の脇刺を見るに、切先三寸許突きたる跡黒く焼けたるやうに成り居たり。則ち藤田平兵衛も其の脇刺を見たり。至極熱性の者と見たりといへり。又野々村勘左衛門、或夜若黨一人・草履取一人召連れ他行し、夜半過ぎ歸宅するに、冬季にて雪も餘程降り積り居り、所々の堀下杯も掻き集め置く程なりしが、松原町の邊へ來りけるに、向より提灯二つ參りたるを見るに、提灯常より高く、堀の上程に見え、甚だ不思議に思ひ、堀腰へ寄

りそひ控へ居けるに、大きな牛の頭の如くにて、左右の角の先よりばつくと火燃ゆる。其の光り提灯のやうに遠くより見ゆるものにて、胴より下は見えず。勘左衛門の頭の上を通るに付き、驚き刀を抜き切拂ふといへども、餘程高くして當らず。其の内に通り過ぎたり。尤も何の障りもなく、若黨・草履取も同じく見たりと。右兩怪異共に金澤松原町邊にての事なりと。其の頃人々承り、奇談之旨申慣したりと、藤田氏咄也と載せたり。按ずるに板坂平内は板坂市右衛門の養子にて、三百石配分知相續し、板坂氏の二代目也。野々村勘左衛門は微妙公小松附士帳に、千石野々村木工兵衛とあり。此の一族なりしかど、子孫連綿せざれば詳かならず。松原町不開門邊はそのかみ惣構の雜木生ひ茂り、狐・狸・獺の住む所にて、利常卿の頃は人家も稀なりしゆゑに、さる怪異などの事ありたるなるべし。

○御門前町

此の町は、今尾山神社の前通なる一町にて、廢藩後松原町の古名に復せり、延寶金澤圖に、千石町の末より十間町入口までの惣構堀端の町地をば、權現堂御門前と記載して、